

『ドストエフスキーの作家像』

(木下豊房著 鳥影社二〇一六)

長瀬 隆

本書は、その全九章の第1章に、二〇一三年「広場」発表の「商品としてのドストエフスキー——商業出版とマスメディアにおける作家像——」を据えている。執筆順に並べられているわけではない。しかし冒頭の章がこれであることは、すなわちそこで「亀山現象」をもたらしたマスメディアの問題が論じられていることは、本書の主題がそれであることを明らかにするものである。だがこれに続く第2から第5章までの、すなわち「作家のリアリズムの特質」、「作品における作者の位置」、「追憶の意味と宗教的思索」、「再読『カラマーゾフの兄弟』」、および「比較文学的論考」の五つの章は、亀山の翻訳が誤ったドストエフスキー文学観にもとづくものとする立場から、木下氏が信ずる真正な作家像を提示する試みと読める。私はその立論のすべてに賛成というわけではなく、教えられた箇所とともに異論のある箇所がある。しかしそれがなされていることは認め、翻訳批判が、それだけに留まっているのではないことを示すために必要かつ欠かせぬ諸章となっている、と理解する。

こうしてこれらに続く第7章「ドストエフスキー文学翻訳の過去と

現在」以下の三つの章が有効なものとなる。すなわち第8章「国際的交流の場から」、第9章「亀山現象批判に関する資料」と進むわけであるが、これら三つの章の総ページ数は、先行する五つの章のそれと拮抗しつつ第1章と接続する格好になっている。またその中でネット連載の第9章が特別に大きい。このことから日本文学との関連を考察した比較文学的考察を含む中間の五つの章も、亀山のドストエフスキーがもつぱら主観的な思いこみに終始していることへの批判の性格をもっていたことが知られ、本書の中心的主題が第1章に謳われていたものであったことが明白となる。そしてそれは「あとがきに代えて」の副題「プロの裏切り、この悪夢はいつまで続くのか」に至って論議の余地のないものとなる。木下氏は亀山『カラマーゾフの兄弟』第一巻(二〇〇七)が世に出て以来、「悪夢を見せつけられ」てきたのだ。所属する日本ロシア文学会では公開討論会を要請し、容れられず退会している。そして後には「日本のロシア文学会はその存在理由が試されていると思う」(本書五一四頁)と記される。ついでながら私は学会員ではなかった。

木下氏は「亀山現象」の発生を歴史的に考察している。すなわち一つのメルクマールといえるのは、一九七一年、ドストエフスキー生誕一五〇周年の記念講演会で五木寛之(早大露文出身)が「明るく楽しいドストエフスキー」を提唱したことである。一五年後江川卓は『謎解き『罪と罰』の「あとがき」でその実践であることを述べつつ、「作家を超える超越的存在」なるものを主張し、それを論者たる己と措定し、「独我論」(勝手気まま論?)的な解釈を打ち出した。「翻訳においては誠実だった江川」とは異なり、この「独我論」を翻訳にも及ぼし、

かつ解釈においては江川以上の主観主義的・恣意的解釈者となったのが亀山郁夫なのである。五木の提唱はもう少し違った意味合いのものだったと思うが、江川以降の概括には私も賛成である。ソ連の崩壊後、ロシアにおいてはもちろんのこと、日本においても基準となるものが一般的には消滅している。亀山はその空気をもろに吸い込み、それに溺れながらもまた利用していると見える。

混乱もしくは混乱と言い換えてもいいのであるが、この状況においてドストエフスキーが何かを啓示しているように思う社会的雰囲気醸成されていた。いわんやこの作家は、その文学を原語で読む者の数が微々たるものであるにもかかわらず、翻訳で読む読者の数は多大であった。新訳でもって一芝居打ってみようとする出版社が現れて不思議はなく、その恰好な訳者として選ばれたのが東外大教授にしてNHK語学放送の講師であった亀山だった。軽妙洒脱というよりは軽薄な感じの人で、あたかも自分が現代日本に舞い降りたドストエフスキーであるかのように錯覚・妄想して、先行訳、主として恩師の原卓也訳を、それこそ「父殺し」的に自己流に書き改め、新訳として提出した。

「自由訳」として出したのであればまだしもだったが、先行諸訳を超える「読みやすい」新訳と宣伝して売り出したのが問題だった。

木下氏は多年にわたって「ドストエーフスキーの会」を主宰し、国際ドストエーフスキー学会の副会長を務め、二〇〇〇年には勤務する千葉大および早大を会場としてその国際学会を仕切った。会の内外から新訳（二〇〇七）にたいする批判が寄せられ、半ば余儀なくされたように新訳の点検・検証に入った。もっともそれに先立つ最初の検証は二〇〇五年刊の『「悪霊」神になろうとした男』にかんするもので、本

書でも第9章では冒頭におかれている。

「スタヴローギンの告白」のうちの少女マトリョーシヤの記述に關連して、「ロシア語原文のほうはあまり気にしないでください」という断りをもって原文の一単語の意味を歪めて訳し、少女に「マゾヒスト的快感」を味わわせ、もってスタヴローギンによる陵辱を合意のものであるかのように描きだした。それを「発見」と自賛し、「世界的な誤読だよ」と褒めてくれる人がいるかもしれない」という痴呆の言葉を吐きつつ、であった。木下氏の怒りにふれるところとなったのであり、言われて読み、私も邪道であると思った。

以後注意して氏のサイトを読みながら、私もまた独自に亀山批判に向うことになった。

二〇〇五年三月全作品を読む会が講師に亀山を招いたとき、私はその人の著訳書は一冊も読んではいない状態で出席している。講演後のビールを飲んだ席で私がペレヴェルゼフ『ドストエーフスキーの創造』（みすず書房、一九八九）の訳者であることを告げると、彼は「あの本には世話になりました」と応じた。後に『ドストエーフスキー 父殺しの文学』（二〇〇四）を取り寄せ開いてみると、たしかに拙訳書からの援用が二か所にわたって見られた。最初はジェーヴシキンとゴリヤートキンの相違にかんするもので問題はなかった。しかし続く「小宇宙としての自意識、サド・マゾヒズム理解の深化」の小見出しのところで、地下室人が論じられ、その女性関係が「恋愛における永遠の失格者（ペレヴェルゼフ）」によって説明されている箇所が気になった。拙訳文では原文に即して「二重人は——恋愛での永遠の失格者なのだ」と訳している箇所の冒頭の主語が「地下室人」に変えられているのだ

った。

ペレヴェルゼフはドストエフスキーの作品の中心に立つ主人公を、社会での地位が小市民であることに起因する ドゥヴァイニク ДВОЙНИК (二重人、分身) と定義した。勝手に行ったのではなく、その第二作の表題が『ДВОЙНИК』であり、『未成年』に多出する言葉なのでそう決定したのである。これには前記の二人に始まり、ラスコーリニコフ、イワン・カラマゾフに至る一系列の多数の人物たちがいる。地下室人はその中間に位置する人物であり、その二重性の特徴は意識と意志の対立・相克である。ドストエフスキーがそのように明確に書いており、ペレヴェルゼフはそれを帰納するように定義しているだけである。つまり原文にきわめて忠実なのだ。

ところが亀山はせっかくペレヴェルゼフを読みながら、このことが眼に入らなかつたようだ。ドストエフスキーをサド・マゾヒズムの作家に仕立て上げたいがために拙訳文を改ざんしたのである。サドの名は『虐げられた人々』にちらりと出てくるだけであり、マゾヒズムにいたっては全作中どこにもまったく見当たらないにもかかわらず、なのだ。事態は今回の木下氏の本書の四一〇〜四一一頁に指摘されている通りである。ドストエフスキーの原文を離れ、演繹的に妄想をたくましくするのは亀山の癖である。

私は亀山の翻訳批判では木下氏のすべてに賛成だった。それでアマゾンおよびHP上で態度を表明し、友人の藤井一行（東外大卒、富山大名誉教授）氏にも伝え、木下説は彼の著書『翻訳の品格』（著者自家

出版会、二〇一一）に共感をもって紹介された。共著者の中島章利氏は、私の説をも援用しつつ日本語を読むロシア人の「ポップ・カルチャーの激発」「翻訳ではなく自身の言葉による再話」という批判的評を、そのロシア語を併記して紹介している。すなわち、突き詰めれば「亀山訳をロシア文に訳し「戻した」ときに、それをロシア人読者は許容するだろうか？」（同氏）ということになる。

この書の公刊に先立って、私が会報の『広場』また『江古田文学』などに発表したドストエフスキー関連の文章は、亀山の名を出さなかつたが、すべてこの人物の「仕事」を念頭においたものとなつた。かつそれらを総括する形で『ドストエフスキーとは何か』（成文社、二〇〇八）を著すことになった。あとがきに亀山批判を記したが、「これだけがひとり歩きする」という成文社側の危惧のために変更、それをHPに収めた。また亀山訳『カラマゾフの兄弟』の点検作業に多大に貢献した人にドストエフスキーの会員の商社勤務者N・N氏がおり、この人が露文で発表した亀山批判があつて、これをご本人の同意のもと邦訳して掲載した。商社勤務のため匿名を余儀なくされている氏は、亀山訳の邦文がいかにドストエフスキーの原文を損ねているかをロシア人に示すべく、その「邦訳文」をロシア語に訳し変えていた。離れわざ的作業であつて、さすがにこの露文は訳しようがなかつた。

ついでながら「ドストエフスキー『悪霊』の衝撃」（二〇一一）というロシアのサラースキナ女史と亀山の対談本がある。これなどもサラースキナが亀山翻訳の日本文が読めていないことよつて成立した対談とみなすことができよう。木下氏が再三指摘しているように、「亀山現象」は日本におけるロシア語読者の層の薄さによつてもたらされ

のだが、ロシア側の日本語読者の少なさによっても助けられていることが分かる。「亀山現象」はこの谷間に咲いたあだ花なのだ。ただし強烈な毒素をはらんでいる。

二〇一一年三月一日福島で地震による原発事故が起こったとき、東電会長はジャーナリストの一行を引率する形で北京にあった。原発安全神話の確立に貢献のあった人々の「慰労」のために東電側が企画したものであった。おおよそ二〇〇四、五年頃から日本では現行のウラン原発に反対する言論は封殺されており、寂として声なしという状態にあった。朝日などでも科学文化部では原発安全派が完勝しており、一行には元朝日の人の名もみえた。社会全体がおかしくなっていたのである。亀山のドストエフスキーでの登場はこの時期に属しており、それと無関係ではなく、私たちはいまやその「モンスター化」（木下氏の表現）に直面している。

現代日本文化を覆う悪しき潮流の露払い役、追隨者、便乗者たちの名を、すべて実名で挙げて批判しており、その人々からの反論が期待される。もしもそれが成されるならば、絶えて久しく論争らしい論争が欠落している現代文学に資するものは多大であろう。私もまたこれに参加すべく著作を用意している。

氏は近年健康を害しており、そのことを本書中でも吐露している。論争は文学を超えて他ジャンルにまで及びまたとうぜん国際化するであろう。氏の健康を気遣いつつ、ますますの健闘を願うのである。

(二〇一六・一一)